

第1回燕市総合教育会議 会議録

1 日 時 平成28年8月25日（木）午後3時～

2 開催場所 会議室301

3 出席者の氏名

市長 鈴木 力

教育委員会

教育長 仲野 孝

教育長職務代理者 斎藤 和夫

委員 黒川 優子

委員 中野 信男

委員 秦 久美子

欠席者の氏名

委員 山崎 克弥

4 説明のため出席した職員

教育次長 山田 公一

教育委員会主幹

長谷川 智

学校教育課長 堀 克彦

子育て支援課長

宮路 豊行

社会教育課長 宮路 一規

地域振興課長

田辺 一幸

統括指導主事 斎藤 曜史

5 事務局書記

学校教育課 太田 和行他 6名

6 傍聴人

4名

7 意見交換

(1) 未来の燕市を担う人材の育成について

① 燕市のこれまでの取り組みと今後の課題について

② 地元の高校の特色化について

(2) その他

会議録 別紙のとおり

1. 開会宣言 午後 3 時

2. 市長挨拶

今年度は、教育大綱をいかに具体化していくかという段階に入るが、現在市が行っている取り組みをおさらいした中で意見交換をしたい。県の守備範囲である高校がこれから大きく変わろうとする動きがある。少子化を背景に、今までの高校の学級数、学校数はこれで良いのかということが、県の問題意識として発表されている。燕市としては現在の子どもたちの教育環境を守っていくことが望ましいが、大きな流れの中でなかなか厳しい環境にある。県は生徒数が減っても特色ある教育、学校運営がされるのであれば、生徒数が減っても学校をなくすということはしないという方針を示している。燕市の 2 つの高校にどういった特色をもたせていくことが可能かを地域の皆さん、教育委員、学校関係者と意見交換をしながら、県へ提言をしていく必要があると考えている。燕市の高校は、どういう特色を持たせることが良いのかという議論を巻き起こしていきたい。今日は教育委員と忌憚のない意見交換をし、燕市の教育・人材育成という観点でより充実した方向に持ていきたいのよろしくお願ひする。

3. 意見交換

(1) 未来の燕市を担う人材の育成について

①燕市のこれまでの取り組みと今後の課題について

○教育長（仲野 孝）が説明

○委員（齋藤 和夫）

これから取り組みを考える時に、燕の発展のために優秀な人材を育てるだけでなく、地元に残ってもらうように考えないといけないのではないか。市外へ出ていくことを引き留める訳にはいかないため、燕市に残る人材を広い層にわたって育成する必要がある。そのため燕市の 2 つの高校を大切にしていくべきと考える。現在中学の生徒数は減少しており、このままでは県の方針である統廃合の対象になってしまふ。吉田高校は自転車、分水高校はカヌーといった特色があるが全国的にまだ誇れるほどではないので、例えば分水高校にカヌーコースを作るなど考えられないか。

○委員（黒川 優子）

中学までの市の事業に対する認知レベルは上がっているが、高校の活動内容の認知度は低い点も多い。この機会に再度総括をしても良いのではないか。例えば子ども夢基金をもつと PR することで、寄附してもらった子どもたちへ直接的に伝わり、そこから地元への感謝の気持ちが増え、将来、燕市への協力をしたいという気持ちも芽生えるのではないか。また燕市は産業の町なので総合選択科目のある学校が増えたら良いと思う。

○委員（中野 信男）

高校までは燕市として色々な施策があるが、最終的に燕市を想う人材をいかに多く作るか、また就職したいと思う企業をいかに燕市に増やせるかが重要だと思うので、就職するまでの環境を整えることが大切になってくると考える。市外へ出た人を引き戻すくらい、産業を充実させることが大切な、教育界だけでなく産業界、農業界全体で考えるべき問題である。また国の示すコンパクトシティと中心から離れた地域の格差をどう関連付けていくかも考え、若者の定着を促したい。

○委員（秦 久美子）

人口が増えればすぐにでも解決する問題だが、最終的に子どもたちが魅力ある就きたい仕事が市内にあるかどうかが一番だと思う。魅力ある企業が身近にあれば、小さい時から夢や希望が膨らんだり、夢を持つ事で色々なチャレンジをしようとすると思う。新しい事業が増え、子どもたちは色々なチャンスを与えられている。子どもたちをその気にさせる大元は地域にもあると思う。地域の大人が子どもの活躍できる環境や、地域と関わる機会を作ることで、子どもの体の成長だけでなく心の成長にも大きく影響すると思う。地域との連携で魅力ある行事を行い、子どもたちが魅力あることに対してやってみたいことが増えると色々な選択肢ができ、県外へ出てもまた燕市へ戻って来るという良いつながりができるのではないか。

○市長（鈴木 力）

色々なご意見をありがとうございます。今後は「東京つばめいと」や「つばめ若者会議」が今の中学生、高校、大学生に意識されるような仕掛けを考えている。最終的には燕市へ定住してもらえるような魅力ある働き場を作ることだが、実際は魅力ある職場は現在も存在するのに、なかなか理解されていないことが課題であり、その取り組みが必要である。また、インターンシップの受け皿を産業界と連携してしっかりと仕組みを構築したい。中小企業であっても世界トップクラスの企業であったり、優れた技術を持っていることを理解して、大企業の歯車となるよりも中小企業の中心として活躍したいと思ってもらうことは燕市へ来てもらうチャンスになる。インターンシップという受け皿を作りながら燕市の産業を理解する人を増やして、定着してもらえる流れを作っていく。国の地方創生の交付金を使ってこれから本格的に取り組みたい。

②地元の高校の特色化について

○教育長（仲野 孝）が説明

○委員（斎藤 和夫）

子どもの少子化は歯止めが利かないと思うので、子どもたちをいかに引き留めるかを考える必要がある。燕市は子育て環境の条件が非常に整っていることや、また産業界と連携

して燕市の特殊な技術も積極的にPRしていくべきである。他市がすでに行っているオープンファクトリー等にも積極的に取り組み、燕の産業をもっと強くしていく必要がある。産業界を上手く誘導しながら燕市を魅力ある町にすることが先決と考える。

○委員（黒川 優子）

若い人にとって燕市は教育環境に恵まれていると思うが、高校も将来を見据えた勉強ができるようあると良いと思う。

○委員（中野 信男）

平成30年には吉田高校が3学級、分水高校が2学級となり、予算も考えた上で県が運営を考えると統廃合の可能性はあると思う。人口が減り、統廃合せざるをえないのは仕方ないが、農業・工業・商業はもっと地域に密着しないとどんどん少なくなっていく。市としての対応を今から考えないと、気がついた時に統廃合されることになるのではという危機感を感じる。

○委員（秦 久美子）

吉田高校と分水高校を比較すると、吉田高校は越後線、弥彦線があって通学がしやすいが、分水高校は極端に電車の本数が少なく、学校を選択する際に選択肢からはずされてしまうので、そういう点を踏み倒す魅力ある特色を出さないと厳しい。また分水高校は特色が見えにくいので、保護者や子どもたちにとって魅力のある学校になるような策を講じて欲しい。

○市長（鈴木 力）

危機感は持っている。放置すると統廃合の対象となる可能性はあるが、生徒数が減少しても特色があれば残してもらえるので、特色をしっかりと持って提案していく必要がある。何を特色とするかはPTAや地域の方と議論を深めていきたい。分水高校はカヌー、吉田高校は自転車とアーチェリーというスポーツのイメージはすぐに湧き、有力な特色の1つとなっているが、スポーツの部活動だけで果たして一つの学校が成り立つことができるのか、少し物足りないのではと考えている。スポーツに勉強もプラスして燕らしい要素をもう一つ考えていかなければ県の牙城を崩すのは難しい。普通高校が良いのか、特色的ある専門的な教科を入れた方が良いのかも議論する必要を感じる。その点が、私たちが練る作戦のテーマになる。

○委員（中野 信男）

地の利という言葉が最近言われるが、それを打ち消す何かがない限り、統廃合を避けるのは難しい。燕中等教育学校のように特色があれば駅から遠くても生徒は集まっている。また燕・三条は工業が盛んなので工業高校を提言してみても良いのでは。

○市長（鈴木 力）

地域と連携するため、高校に大学や研究機関における寄附講座のような形態を導入し、燕の産業界から講師として来てもらって色々教えてもらい、産業界から高校の中で授業を1つ受け持ってもらえる事ができればまさに地域との連携した特色となる。頭の中にはモデルとして山形県の長井工業高校がイメージとしてある。そこは地域の産業界が高校と連携して生徒を受け入れたり、授業に参画したり、設備支援をしたりしている。燕市も授業の中に産業界が入っていく仕組みができれば大きな特色になると考えている。

4 閉　　会　　午後3時56分